関連記事

令和5年 9月 8日（金） 朝刊・夕刊
西日本新聞 23面（社会面）

リーチ復活 北九州から

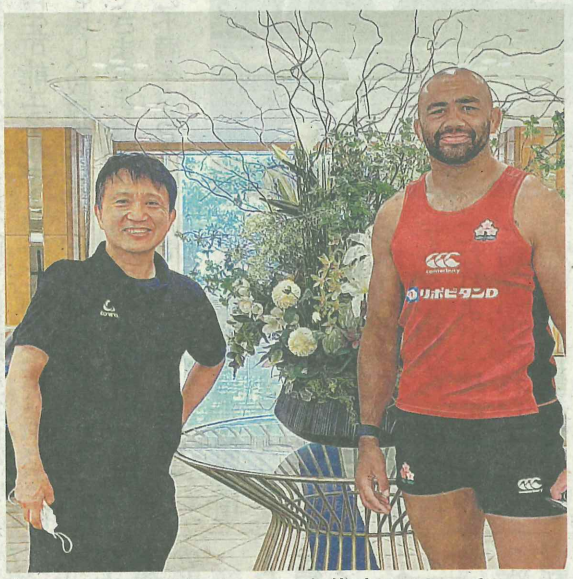
あす未明開幕 4大会目ラグビーW杯へ

ラグビーのワールドカップ（W杯）フランス大会が8日（日本時間9日未明）に開幕する。史上初の8強入りを果たした4年前の日本大会で主将を務めたリーチ・マイケル(34)は今大会も、日本代表に欠かせない大黒柱だ。だが、けがに苦しみ、現役引退を考えた時期もあった。窮地に立たされ、向かったのが北九州市だった。【14面参照】

「ここまで復活するとは思わなかった。本当にラグビーを引退しようと思っていた」。8月の代表発表後の会見。4大会連続のW杯代表入りを決めたリーチは苦悩を吐き出した。

ニュージーランドから15歳で来日し、東海大時代に代表入り。2015年大会では主将として、優勝候補の南アフリカを撃破する「世紀の番狂わせ」を演じた。19年秋の日本大会も主将として「ワンチーム」にまとめ、ボールを持てば「リ～チ」の声援が飛ぶ日本ラグビー界の顔になった。

だが、開幕前の春に股関節を痛めたこともあり、日本大会のアイルランド戦では先発落ち。W杯後も思うようなプレーができず、引退が脳裏をよぎった。ニュージーランドの医師の手術を受けようとしたが、コロナ禍で渡航できない。



内田医師（左）と日本代表のリーチ・マイケル（内田さん提供）

けがで引退危機、支えた名医

この医師と縁があった産業医科大若松病院（北九州市）の内田宗志医師(56)の名を聞いた。トップアスリートらの手術を年間400件こなす股関節の名医に診察を依頼した。

20年3月、北九州市を訪れたリーチは痛みで歩くのもやっとの状態だったという。股関節唇損傷。悪化すれば日常生活にも支障が出るレベルだったが、手術で治る可能性も残されていた。内田医師がリスクも含めて説明すると、選手生命にも関わる判断を迫られたリーチは静かに耳を傾けて言った。「分かりました。リハビリ頑張ります」

痛めていた足首とともに手術に踏み切り、1カ月半の入院。誰にでも自然体で接するリーチ。地道なリハビリも弱音を吐かず、一つずつこなす。内田医師が、手術を前に不安を抱くラグビー部の男子高校生の話をすると、リーチは自らの病室に高校生を招いて「先生を信じよう」と激励し、サイン入りのジャージーを渡した。内田医師は「自らも苦しいはず。日本人より日本人らしい武士道精神を持っている」。

退院後も年1回の定期検査で北九州へ。内田医師もリーチの所属チームの本拠地・東京に足を運んだ。リーチの声が次第に弾んだ。「代表の体力テスト、FWで2番目の数値が出ました。先生のおかげです」

信頼と感謝―。昨年6月に北九州市で行われた日本代表の試合のチケットを贈られ、その回復ぶりを目の当たりにした内田医師。「重圧はすごいだろうが、楽しんでプレーしてほしい」。苦難を乗り越え、より存在感が増したリーチの活躍に期待を込める。

（大窪正一）

（掲載について西日本新聞社許諾済、無断転載（コピー、スマートフォン等での撮影）禁止）

総務課広報係